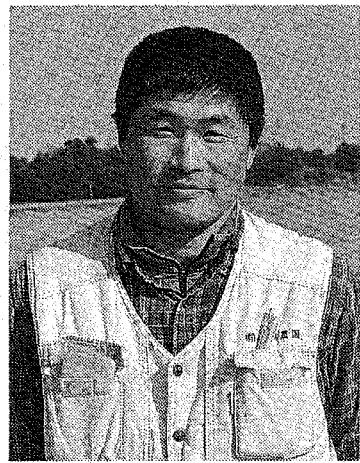


農家ルポ



農場に立つ大嶋さん

古くから農業が盛んしている。関東平野の中でも比較的安定した農業地域である茨城県結城市。首都圏の生鮮野菜供給地として、ハクサイ・レタス・トマトなどの露地野菜等、多くの農産物の生産が盛んである。

茨城県結城市でハクサイ・レタスを中心に生産している㈲大嶋農園の大嶋聰史さん(41歳)は、両親と研修生7名(中国2名、ベトナム5名)で、およそ13haの農地を管理している。

大嶋聰史さんは、花菜などを栽培していたが、父親の代から野菜作

で、関東平野の中でも比較的安定した農業地域である茨城県結城市。首都圏の生鮮野菜供給地として、ハクサイ・レタス・トマトなどの露地野菜等、多くの農産物の生産が盛んである。

古くから農業が盛んしている。江戸時代からこの地域で農業を営んでおり、聰史さんは8代目となる。「子供のころはまだ桑畠が見られた」と言うように、「ユネスコ無形文化遺産」に登録された高級織物「結城紬」の产地である。現在ではそれでもある。現在ではそれが野菜畑に代わり、大嶋さんの家でも以前は、うるち米「かんぴょう」、落花生などを栽培していたが、父親の代から野菜作

時間が経つと分解されて土に返る「生分解性マルチ」の効用を活かして野菜生産に取り組んでいる茨城県結城市的大嶋聰史さん。経営する面積が大きく、その回収及び処理作業の軽減効果から次第に利用面積が拡大。いまではほぼ6割で生分解性マルチを利用して生産している。大嶋さんを訪ね、生分解性マルチ利用のメリットや拡大していく経緯などを伺い、野菜生産にかける情熱に触れた。

大嶋 聰史さん(茨城県結城市)

現在の生産物と耕作面積は、春ハクサイ=1200ha、枝豆=300ha、秋レタス=250ha、秋冬ハクサイ=85ha。使用する面積は、年々拡大している。

大嶋さんが生分解性マルチと出会ったのは6年前。販売店の担当者に勧められたのがきっかけで、使用を始めた。「価格は

している耕作面積は、春は農業を営んでおり、聰史さんはまだ桑畠で農業を営んでおり、聰史さんは8代目となる。秋レタス=1100ha、トマト=45ha、秋冬ハクサイ=150haで、1年を通してカット野菜やキムチなどの加工業者へ供給している。

当に高いもの」という感

回収や処理が軽減

一般マルチは処理費増加

間が掛かるようになつ

た。また、この地域特有の風によって、マルチが他の畑に飛散したり、用

水路に詰まつたりする問題の解決にも貢献している。

これまで大きな負担と

これまで大きな負担と

これまで大きな負担と

これまで大きな負担と

これまで大きな負担と

これまで大きな負担と

これまで大きな負担と

こともある」。1年を通じて様々な作物を栽培し

ることもある」と感じ

ている。今年からは、枝豆の耕作面積を拡げ、全てで生分解性マルチを導入する予定だ。

高校を卒業してからは、八ヶ岳中央農業実践大学に進み、その後アメリカで2年、農業研修を行ない、帰国後両親と共に農業を行った。

アメリカでは、大規模

ながっている。「マルチの片付けに時間がかかる」と、その

ことから、年々生分解性マルチの利用面積は拡大している。

「価格のみを見ると生

分解性マルチの価格は既存のものよりも高い

と見て、生分解性マルチは、耕作スケジュールを計画通りに進める上で欠かせないものとなつてい

ることもある」と、大嶋さんは、これまで

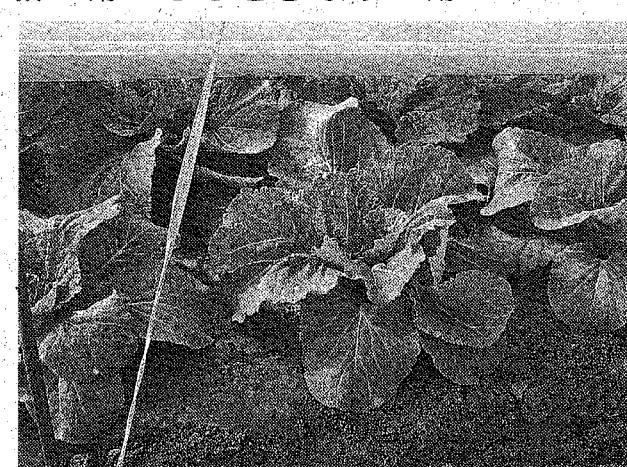
作物を育てながら、生分解マルチを試してきた。

「時期によっては、温度や湿度の影響で予定通り早く分解が進み、効果が得られないこともあります。大嶋さんは、これまで

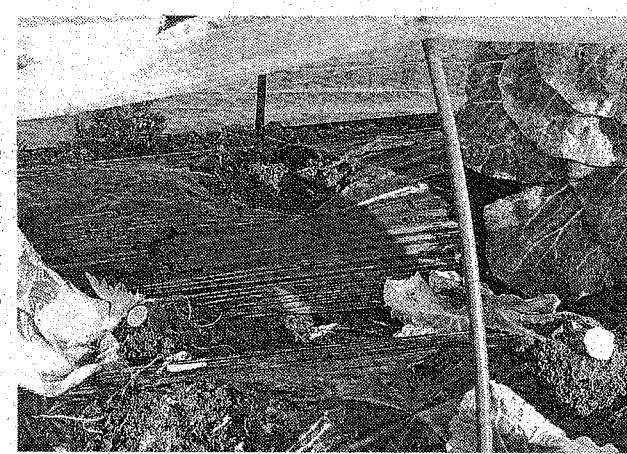
マルチを導入してきたことが、研修で養ってきたコ

ストや作業効率への考え方がある。早くから生分解性

生分解性マルチで効率作業



張って40日後のマルチ



秋冬ハクサイ収穫後の分解が進んでいるマルチ

農家を中心

に、2つの農

家で研修した。

アメリカ

は農地のスケールが大き

く、コストと作業の効率

が求められる。

そのため

に、能力の高い従業員が

移動の道路を拡張した

り、地温確保などの効果がみ

られ、耐久性や柔軟性な

ど既存のマルチと変わら

ない機能を備えた製品と

出会いしたことにより、し

だいに使用面積を拡大

てきた。

生分解性マルチを利用

する最大のメリットは、

回収及び処理作業の軽減